

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集: FXニュースレター

執筆担当: 斎藤登美夫



◆◆◆ No.0865 ◆◆◆

25/11/05

【 10 月の為替変動はなかなか大きい、2 ヶ月連続の可能性は!? 】

先週末で終了した 10 月のドル/円相場は、月間変動幅が 7.86 円 (146.59-154.45 円) となった。8 月、9 月と月間変動は 5 円以下にとどまっていたが、10 月は復活の狼煙を挙げたと言えるかもしれない。ちなみに、月間変動 7.86 円は今年 3 番目の大変動だ。

さて、そんなドル/円相場、チャートを素直にみればリスクはドル高・円安方向。先週もレポートしたように、飽くまで可能性ということでは年内高値の「158.88 円」を目指した値動きも否定できない。しかし、ご承知のように新しく財務相に就任した片山さつき氏から、ここ数日は円安けん制発言も聞かれている。果たして、どこまでドルは水準を上げることが出来るのだろうか。

◎経験則ではわずかに「ドル高有利」も、直近 5 年は逆に「ドル安」進行

以下では当レターの恒例となっている過去の経験則からみた月間見通しをレポートするが、前段階としてまずは 1990 年以降昨年まで 35 年間の戦績を見ておくと、過去の 11 月相場は 20 勝 15 敗となっていた。率換算で 6 割にはとどかないが、それでも「わずかにドル高有利」と言えそうだ。

しかし、やや興味深いのは 2020 年以降昨年まで、つまり直近 5 年間だけを見ると、実はすべて逆方向の「ドル安・円高」へと振れている。たとえば昨年も、月初のオープンが 152 円台。月半ばにかけて 156 円台まで上昇するも続かず、月末に掛けて一転ドルは急落に。150 円を割り込み 12 月を迎えていた。

いずれにしても、為替市場関係者のあいだで、よく取り沙汰される話として「年末にかけてドル高進行しやすい」というモノがあり、実際に 12 月は確かにそういった傾向もうかがえる。しかし、ここ数年の 11 月はむしろ逆方向に動くリスクが高いのかもしれない。ヒョッとしたら、どこかで需給要因などが変化、潮の目が変わった可能性もある。頭の片隅にでも、是非とどめておいて損はないだろう。

また、そんな 11 月のドル/円相場には、もうひとつ「月間の変動幅そのものが比較的大きい」という特徴がうかがえる。典型例は直近でいうなら、11.32 円の変動を記録した 2022 年や、同じく月間変動幅 13.36 円で年間 1 位の大変動となった 2016 年など。また昨 2024 年も、年間順位としては中位ながら月間変動 7.29 円となかなか大きな変動をたどっていた。動くときには、かなり大きく変動することも決して少なくないだけに「今年も」と、2 ヶ月連続の大変動を思わず期待してしまうのは筆者だけだろうか。

一方、過去の 11 月をニュースの観点から調べてみると、世界的に見て様々な大事件が少なくないが、今回の当レターでは省かせていただく。

ただ、昨年の 11 月は「トランプ氏が米大統領選で勝利収める」、「第 2 次石破内閣が発足」、「自民・公明・国民民主の 3 党が『年収の壁』見直しで合意」といった日本に限らず世界的に重要な「政治ネタ」が目についた。折しも、日本は石破首相から高市首相へと、国のトップが変わったばかり。今年の 11 月も、日本を中心に、各国の「政治」に関するニュースには要注意という気がしている。

また、それとは別に話を為替あるいは金融に絞っても、過去の 11 月は「ポンドショック (1959 年)」、「日本政府が円急騰対策を発表 (1977 年)」、「カーター米大統領がドル防衛策発表 (1978 年)」、「ドル/円が 278.50 円の戻り高値を示現 (1982 年)」、「アジア通貨危機の余波を受け韓国が通貨切り下げ (1997 年)」、「ECB などがユーロ買い介入に動意 (2000 年)」など枚挙に暇がない。

こちらについても、以前報じた「米国が自国通貨ドルの切り下げに再び動く」という「プラザ合意 2.0」の話はトンと聞かなくなってしまうが、前段で取り上げたように片山財務相が 150 円以上のレベルで数回円安けん制発言に動くなど、ドル/円実勢相場はやや気になるゾーンへと入りつつあることは間違いなさそう。そのため、もちろんレベルやドル高進行スピード次第だが、昨年 7 月以来となる財務省による「ドル売り・円買い市場介入」が観測されても不思議はないように思っている。(了)

